



「こころを育む総合フォーラム」は、下記のみなさまからのご協賛・ご後援をいただき活動しております。

協 賛

トヨタ自動車株式会社

パナソニック株式会社

後 援

文部科学省

東海旅客鉄道株式会社

読売新聞社

こころを育む総合フォーラム  
2015年度

# 活動報告書

こころを育む総合フォーラムに関するお問い合わせ

公益財団法人 パナソニック教育財団



こころを育む総合フォーラム事務局

〒105-0001

東京都港区虎ノ門1-1-10 第2ローレルビル6階

TEL.03-5521-6100 FAX.03-5521-6200

URL <http://www.kokoro-forum.jp/>

公益財団法人 パナソニック教育財団

「こころを育む総合フォーラム」は、昨今の様々な社会事象から浮かび上がる日本人のこころの荒廃に危機感を抱き、はどめをかけたいとの思いを共有する有識者16名が集い、2005年4月に設立されました。

そして設立以来、日本人のこころのありようについて討議を重ね、2007年に未来を担う子どもたちのためにできることを提言にまとめ、発表しました。

提言では、とくに「家庭」、「学校」、「地域」、「企業・社会」の4つの分野へのメッセージという形で、より具体的な提案をさせていただきました。

- \*「家庭」という場所を見なおそう
- \*「学校」という場所を見なおそう
- \* 子どもを育む場としての「地域」を見なおそう
- \* 情報社会における「企業・社会」の使命と役割を見なおそう

本提言が、それぞれの立場でできることを考えるヒントにいただければと思います。(提言の内容はホームページからご覧いただけます。)

この提言を具現化するために、子どもたちの“こころを育む”活動を応援し、広げるための全国運動の呼びかけを始めました。

全国各地で取り組まれているこころを育む優れた活動を募集・表彰し、広く紹介しています。

また、有識者メンバーが各地を訪問し、地域の活動の実践者と交流する全国キャラバンを行っています。

2015年度は、設立から10年を迎え、5月に東京で「特別シンポジウム」を開催しました。11月には昨年度の全国大賞である「仙台市立南吉成中学校」で全国キャラバンを行い、12月には「こころを育む活動」全国大賞および各賞を決定し、表彰式を開催することができました。

本書が、「こころを育む」環境づくりのための取り組みのヒントになり、活動の輪がさらに広まるきっかけとなれば幸いです。

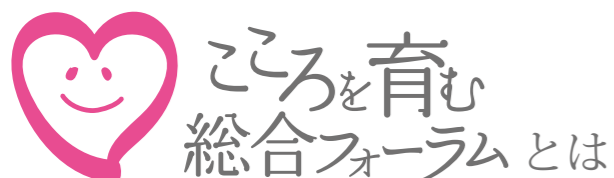
今後とも変わらぬご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

|          |    |                                   |    |
|----------|----|-----------------------------------|----|
| Contents | 目次 | ■ フォーラムの概要                        | 4  |
|          |    | ■ 2015年度の活動                       |    |
|          |    | ● 一年間の取り組み                        | 6  |
|          |    | ● 特別シンポジウム                        | 8  |
|          |    | ● 全国キャラバンin 仙台                    | 12 |
|          |    | ● 子どもたちの“こころを育む活動”表彰              |    |
|          |    | 全国大賞                              | 14 |
|          |    | 鹿角市立八幡平中学校 (秋田県鹿角市)               |    |
|          |    | 優秀賞                               | 18 |
|          |    | 一般社団法人                            |    |
|          |    | キッズ・メディア・ステーション (宮城県仙台市)          |    |
|          |    | 優秀賞                               | 19 |
|          |    | とどろみの森学園 ~箕面市立止々呂美小・中学校~ (大阪府箕面市) |    |
|          |    | 奨励賞                               | 20 |
|          |    | 特定非営利活動法人                         |    |
|          |    | 湘南市民メディアネットワーク (神奈川県藤沢市)          |    |
|          |    | ● 前年度受賞団体の受賞後の活動紹介                | 21 |
|          |    | ■ 歴代全国大賞 受賞団体                     | 22 |
|          |    | ■ パナソニック教育財団 紹介                   | 23 |

### こころを育む総合フォーラム 活動の経緯

- 2005年 「こころを育む総合フォーラム」発足  
学界、経済界をはじめ各界を代表する16名のメンバーで発足
- 2007年 議論をまとめた「提言書」をプレス発表  
発足から計18回の討議を経て、提言書を公表
- 2008年 「全国運動」スタート  
全国キャラバン、子どもたちの“こころを育む”活動の募集・表彰を開始 (2008年度～)
- 2011年 東日本大震災支援活動(トヨタ財団との共同プロジェクト) 実施  
「子どもの居場所づくりと次世代の育成」に向けた取り組みの支援を実施 (2011～2013年度)
- 2013年 「有識者対談」WEB連載(東洋経済オンラインとのコラボレーション企画)  
山折座長を中心に有識者メンバーと「日本人としての教養～次世代に継承したいこと」をテーマに対談 (2013年度～)
- 2015年 フォーラム活動10年  
東京にてフォーラム活動10年特別シンポジウムを開催

# フォーラムの概要



## 発足の経緯と設立趣旨

「ココロを育む総合フォーラム」は、学界、経済界をはじめ各界を代表する有識者16名により、2005年4月に設立されました。

家庭や教育現場における人間関係の乱れ、心の凍りつくような残酷な事件の発生など、かつて日本人がもっていたはずの倫理性の喪失を示す兆候がいたるところにみられます。その原因は、第一に人間の精神性と倫理感を育む「心の教育」がおろそかにされてきたからではないか。このような問題に取り組むため、各方面の専門家の英知を結集し、何が解決のために緊急の問題であるかを明らかにするとともに、広く意味ある提言をおこなっていきたいと考えています。

### ■ココロを育む総合フォーラム 有識者メンバー (2015年度) (敬称略・50音順)

|                               |                                |
|-------------------------------|--------------------------------|
| 安西祐一郎 (日本学術振興会 理事長)           | 張 富士夫 (トヨタ自動車 名誉会長)            |
| 石井 幹子 (石井幹子デザイン事務所 主宰)        | 遠山 敦子 (パナソニック教育財団 顧問)          |
| 市川 伸一 (東京大学大学院 教育学研究科 教授)     | 長榮 周作 (パナソニック 代表取締役会長)         |
| 上田 紀行 (東京工業大学リベラルアーツセンター長・教授) | 中村 桂子 (J-T生命誌研究館 館長)           |
| 葛西 敬之 (東海旅客鉄道 代表取締役名誉会長)      | 野依 良治 (科学技術振興機構 研究開発戦略センター長)   |
| 梶田 勲一 (奈良学園大学 学長)             | 平野啓一郎 (小説家)                    |
| 金澤 一郎※ (国際医療福祉大学大学院 名誉大学院長)   | 三村 明夫 (新日鐵住金 相談役名誉会長)          |
| 佐々木 毅 (東京大学 名誉教授)             | 山折 哲雄 (国際日本文化研究センター 名誉教授 宗教学者) |
| 滝鼻 卓雄 (元 読売新聞東京本社会長)          | 鷲田 清一 (京都市立芸術大学 理事長・学長)        |
| 竹内 洋 (関西大学 東京センター長)           |                                |

※金澤一郎様は2016年1月のご逝去されました。

## 有識者会議

有識者会議(ブレイクファースト・ミーティング)は、「ココロを育む総合フォーラム」発足メンバー16名によりスタートしました。現在は、有識者19名により会議を継続。ゲストスピーカーを招き、子どもたちをとりまく環境、課題について討議を深めています。



### 提言書

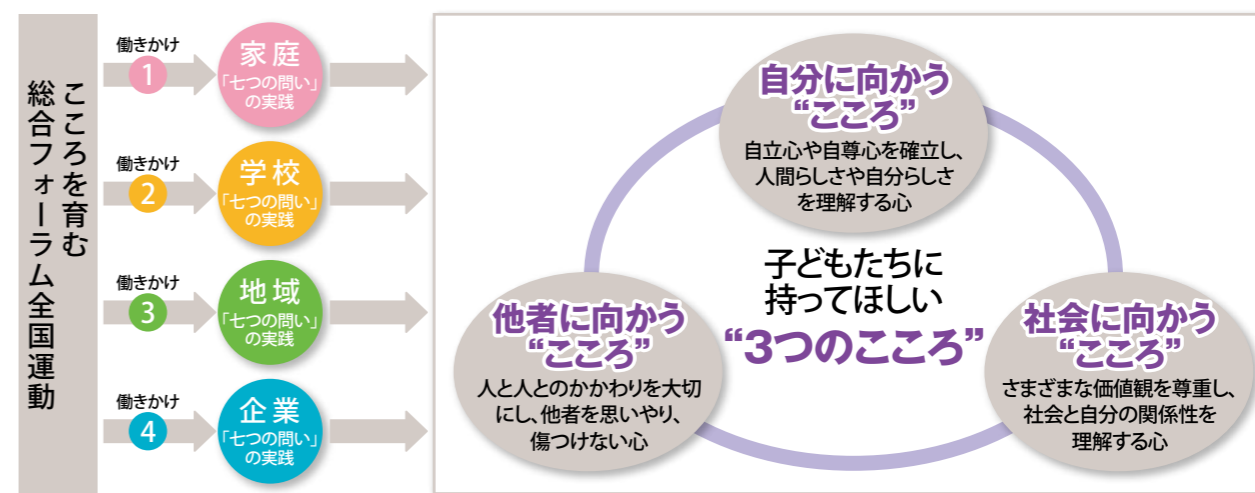
発足から計18回の討議を経て、2007年に提言書をまとめ公表しました。家庭・学校・地域・企業という4つの分野で育みを見直すために、それぞれの立場でできることを呼びかけています。

提言書は、「ココロを育む総合フォーラム」ホームページでご覧いただけます。  
<http://www.kokoro-forum.jp/project/message.php>

## 全国運動

提言を具現化するために、2008年より全国各地で実践されている子どもたちの“ココロを育む活動”を支援する全国運動を呼びかけています。家庭・学校・地域・企業という子どもたちを取り巻く各分野においてそれぞれの立場でできることを意識したさまざまな活動が実践されること、そして子どもたちに持ってほしい“3つのココロ”をバランスよく育むことを目指し、「呼びかける」「紹介する」「ほめる」「広める」の4つの考え方をもとに展開しています。

### 全国運動のねらい



### 全国運動を進めるための考え方

#### 呼びかける

全国運動の趣旨をより多くの人に知らせ、共感する個人・団体を増やすと同時に、広く社会一般に問題提起をします。

- パンフレットやホームページを作成し、運動の趣旨を多くの人に知らせます。
- 提言書を発行し、広く社会に呼びかけます。

#### ほめる

全国各地で実践されている活動の中から、他の活動の参考となるよい活動を表彰し、活動の元気づけをします。

- 主に学校、全国小学校道徳教育研究会、PTA、NPO団体を通じて、多彩な活動を募集します。
- 他の活動の参考となるよい活動を表彰します。

#### 紹介する

全国各地で実践されている活動をより多くの人に知らせ、それらの活動へ参加・支援するきっかけを作ったり、活動の改善・拡大の機会を提供します。

- 活動報告を作成し、広く一般化できる活動や特徴ある取り組みを集めて紹介します。

#### 広める

全国運動を広めるために、運動に関心のある個人・団体同士の交流を図り、情報交換などを促すことで、運動のネットワーク化を進めます。

- 全国で多彩な活動を行う団体のネットワークづくりをします。
- シンポジウムや全国キャラバンを実施します。



# 有識者会議

## 有識者会議

2015年度のブラックファスト・ミーティング（有識者会議）は、第38回を2015年10月15日に、第39回を12月15日に開催しました。第39回は帝国ホテル（東京・千代田区）で、解剖学者の養老孟司・東京大学名誉教授をゲストスピーカーにお迎えし、「次世代に伝えたい日本人のこころ」をテーマに基調講演をいただきました。日本人の「供養」や「自己」について、ユーモアを交えながら自身の経験を語り、出席した有識者との間で一問一答を含めた活気ある意見交換が行われました。



講演中の養老孟司・東京大学名誉教授

### 基調講演の要旨

子どもの頃から虫の標本づくりを続けてきた私は、今年（2015年）、鎌倉の建長寺に「虫塚」をつくった。私が「虫の日」と呼ぶ6月4日にお坊さんに来てもらい、「虫供養」をした。虫好きの知り合い30人ほどを呼び、殺虫剤で有名な企業フマキラーさんにも声をかけた。日本中の医学部が毎年行っている解剖体の慰霊祭＝供養は歴史が古く、山脇東洋による最初の慰霊祭は1754年のことだ。解剖では、“加害者”である私たちが“被害者”に対する気持ちを表さないと気が済まない。そういうことが日本の「供養」には含まれている。世界中に支店があるケンタッキーフライドチキンで鶏供養をするのは日本支社だけだという。供養という概念が日本と海外ではずいぶん違う。これは外交問題にも通じる気がする。

もう一つ「自己」という概念について考え続けている。若い人や日本全体の考え方は以前から混乱している気がして『「自分」の壁』という本も書いたが、欧米と日本の文化には大きな違いがある。夏目漱石が講演集『私の個人主義』の中で言っている自己本位とは、自分勝手の意味ではない。ロンドン留学の終わりに「これから先は自分で考えてやっていくしかない」と気づいた、社会人として学者としての自立宣言と読める。私が思うに、英文の「I am a boy」の「I」は要らない。「am」というbe動詞の主語は「I」しかあり得ないから、「am a boy」でわかるはず。ラテン語では使わない「I」の文化は、キリスト教が入ってきて変わったことの1つであろう。

※基調報告の詳細はホームページに掲載しています。

## 特別シンポジウム

### テーマ 「次世代に伝えたい日本人のこころ」

活動10年の節目として2015年5月23日（土）、イノホール（東京・霞ヶ関）において、特別シンポジウムを開催しました。当日は「次世代に伝えたい日本人のこころ」をテーマに、右記の3部構成で行い、たくさんの方々がご来場されました。見失われつつある、日本人としての大切な価値観を子どもたちへ伝えていくにはどうしたらよいか。参加者一同がその必要性を確認し、思いを新たにす場となりました。



第3部 パネルディスカッション

ホール一杯の参加者

- 第1部 山折座長による講演
- 第2部 これまでの10年の軌跡
- 第3部 有識者メンバーによるパネルディスカッション

※特別シンポジウムの内容はP8～11で紹介しています。

## 共同イベント

2015年11月4日、公益社団法人 全国少年警察ボランティア協会の主催で開催された、第22回少年問題シンポジウム「次代を担う少年の育成のために～進学・就労機会づくりによる積極的な立ち直り支援～」に、協力しました。当日は東京・隼町のグランドアーク半蔵門で開催され、少年警察ボランティアなど関係者251人が出席。子どもの貧困が青年期の不安定就労や貧困に影響している実態、非行少年の立ち直りと成長・発達について話し合われました。

※本シンポジウムの内容は、『少年研究叢書27』として刊行し、全国図書館他へ配布。



『少年研究叢書27』

# 全国運動

## 全国キャラバン

前年度に全国大賞を受賞した団体の地元をフォーラムの有識者メンバー訪れ、「こころを育む」活動を実践している方々と交流する全国キャラバンを毎年開催しています。地域の皆さんと共に、子どもたちのあるべき姿や健やかな未来を考え、活動の輪をさらに広げる貴重な機会となっています。

### テーマ 全国キャラバン 2015 in 仙台・南吉成中学校

内容 11月13日、2014年度にこころを育む活動・全国大賞を受賞された「仙台市立南吉成中学校」で400名の参加者を迎えて開催しました。「次世代に伝えたいこころ ～東日本大震災を通して～」をテーマに、午前中は南吉成中学校の3年生が中心となって地域の方々を中学校へ誘導する「地域避難訓練」、午後からは体育館で活動報告と生徒による成果発表、山折座長の講演、地域の方々のパネルディスカッションを行いました。

※全国キャラバンの内容はP12～13で紹介しています。



地域住民を中学校へ誘導する「地域避難訓練」



生徒によるAED使い方講習

## 子どもたちの“こころを育む活動”表彰

未来を担う子どもたちの“こころを育む活動”に献身、努力されている団体の優れた活動を全国の家庭・学校・地域・企業などに紹介して活動の参考としてもらうこと、そしてさらに活動を広げてもらうことを目的に、表彰を行っています。選考については、PTA関係者、学校関係者、NPO関係者、その他協力団体関係者等による第一次および第二次選考を経て、こころを育む総合フォーラム有識者によって最終選考をおこない、受賞先を選定しています。

### テーマ 2015年度 子どもたちの“こころを育む活動”表彰式

内容 今年度は2015年12月17日、帝国ホテルにて「2015年度 子どもたちの“こころを育む活動”表彰式」を開催しました。8回目となる今年度は全国から寄せられた応募総数101団体の活動より4件を選出し、表彰しました。

全国大賞は、「八幡平ボランティアガイド」をテーマに活動された「鹿角市立八幡平中学校」（秋田県鹿角市）が受賞されました。ほかに、優秀賞を2団体、奨励賞を1団体が受賞。受賞団体による事例発表では、活動の様子が伝わる写真や活動に取り組む方々の生の声が盛り込まれた興味深い内容が紹介されました。



2015年度受賞団体の皆様と有識者メンバー



子どもたちの作品や活動内容をパネルで展示



活発な意見交換が行われた交流会



全国大賞は「鹿角市立八幡平中学校」が受賞

※受賞団体の活動内容はP14～21で紹介しています。



# 特別シンポジウム

## 開催テーマ

### 「次世代に伝えたい日本人のこころ」

2015年5月23日(土)  
イノホール(東京・霞ヶ関)

「こころを育む総合フォーラム」活動10年の節目として2015年5月23日(土)、イノホール(東京・霞ヶ関)において、特別シンポジウム「次世代に伝えたい日本人のこころ」を開催しました。第1部は山折座長による講演、第2部は10年間の活動と全国大賞を受賞された団体のVTR紹介および受賞2団体によるステージ上での実演、第3部はこころを育む総合フォーラム有識者メンバーによるパネルディスカッションという3部構成で行い、多数の方々にご来場いただきました。

## 講演

### 第1部

テーマ 「次世代に伝えたい日本人のこころ」

講演者 山折 哲雄氏

(国際日本文化研究センター名誉教授、こころを育む総合フォーラム座長)



### ■失われつつある「甘え」「甘えられる」人間関係

50年程前に大ベストセラーになった土居健郎さんの『「甘え」の構造』という本がある。甘えとは、親子、夫婦、友人、師弟など親しい相手との人間関係が基本であり、相手あってこそそのもの。この本が2000年頃から関心を持たれなくなった原因について、土居さん自身が増補版の中で「甘えの関係で重要な役割を果たしていた“相手”がITの情報社会の中で失われた」と分析しており、「なるほど」と思った。2000年前後からオウム真理教の事件はじめ、思いもよらなかった大事件が続き、「心の闇」という言葉が盛んに使われるようになった。甘えの人間関係において最も重要だった「相手」というものが、いつのまにか「他者」という言葉に置き換えられてしまっていた。それを媒介したのが、ITに基づく情報社会＝相手が見えなくなってしまう状況ではなかったか。そこに「心の闇」の深さの秘密があるような気がする。

### ■タイトルを「心」から「こころ」に変えた漱石

そう考えたとき心に浮かんだのが、100年前に夏目漱石が書いた小説『こころ』の世界だ。朝日新聞に連載された時のタイトルは漢字の「心」だったが、本人の強い希望で岩波書店から単行本として出版される時には平仮名の「こころ」と変えられた。それはなぜだったのか――。これは以前から私が抱いていた疑問で、その理由を明示する資料にはまだ出会っていないが、江藤淳さんが指摘した通り、出版された『こころ』の表紙の装丁には中国の儒者・荀子の言葉が組み込まれていて、私はそこに着目するようになった。

荀子という人は、人間は本来善なる存在であるとする孟子の「性善説」に対して、人間とは一皮むけば悪と罪にまみれた存在だという「性悪説」を説いた思想家だ。私の解釈だが、漱石は、自分が「心」という小説を書いたのは性善説の立場からではない、むしろ人間というのは一皮むくと悪いことを平気とする存在だということに改めて気づき、それであとから述べるようにタイトルを変えなければと思いついたのではない。

小説『こころ』の最後に「先生の遺書」という部分が出てくるが、

その中に、表紙を飾った荀子の思想をそのまま日本語で表現した先生の言葉が出てくる。良いことをしようとするのが普通の人間だが、どんな善人でも何かの拍子で悪いことをする人になってしまう……。『こころ』では、誠実に学問の道を進んでいるはずの先生が親しい友人のKを裏切って、その愛する女性を奪ってしまったという告白が出てくるが、それに当たるだろう。ここに出てくる善人・悪人論は荀子の考え方に即応するわけだ。『こころ』以外の作品、『行人』や『門』でも、こころの苦しみが主題になっている。この100年、日本人の多くが人生や教養の指針として愛読し続けてきた漱石文学の影響を考えると、こころの世界というものがいかに重く、深く、難しい問題であるかを思わずにいられない。

### ■和語と漢語の二重構造から生まれた日本人の「心・こころ」

漱石が「こころ」と「心」を使い分けた理由について考えるうちに気づいたことがある。単純化しては言えないが、万葉集や源氏物語には平仮名の「こころ」という言葉がたくさんでてきて人間のあらゆる喜怒哀楽の感情や精神世界の現象を表現しているが、それは人間の煩悩そのものを表していて「煩悩系」と言ってもいいだろう。つまり今日でいう「心の闇」に通じるような煩悩系の世界をそれで表そうとしていたことがわかる。そのことを物語者たちは自覚していたからこそ、それをどうにかしなければならぬ、煩悩系「こころ」を飼い慣らしコントロールしなければならない、という問題意識がそこから生まれた。そこで大きな役割を果たし始めるのが漢語系の「心」で、その仕事を最初に体系的にやったのが中国に留学した僧侶たちだったと私は思う。空海が「十住心」、最澄が「道心」という言葉を使い、以後は菩提心、求道心などたくさん使われるようになる。やがてそれが芸術や心身訓練の世界でも、例えば世阿弥の初心、無心、それから心身一如、さらには心技体という風に漢字の「心」を用いる例が広がっていった。今日の道徳心、公共心、愛国心というのもその流れの中から使われるようになった。

一方で、大和言葉の「こころ」も至るところで使われていく。言ってみれば和語系・大和系の「こころ」と漢語系の「心」が二重構造化し、その中で日本人の伝統的な「心・こころ」に対する考え方が作られ、育まれていった。だからこそ外国の日本研究者はこの言葉遣いに強い関心を示す。けれども、英語でもドイツ語でもフランス語でも、日本人が使っている「心・こころ」の世界を十分に表現しきれない、と彼らは異口同音に嘆いている。中国文明を受け入れてきた日本人の「和魂漢才」、あるいは明治以降の「和魂洋才」にも共通する二重構造の文化意識の問題であるが、その根本にあるのは、やはり言葉の問題だろう。万葉仮名の時代に始まって片仮名、平仮名、やがて漢字交じりの平仮名・片仮名の文章が書かれるようになる。宗教言語として漢字の「心」が成熟した13世紀には、親鸞も道元も日蓮も漢字仮名交じりのすばらしい文章を書いている。

### ■今こそ日本人の伝統的な内面世界を考える

この伝統ある構造が揺らぎ始めたことが、あるいは2000年前後からのIT問題と深いかわりがあるかもしれない。日本語が限りなく平仮名化、片仮名化して漢字の比重がだんだん低くなっているという問題がそれとかわっている。私は、漱石が提示した漢字の「心」と平仮名の「こころ」という問題、この二重構造による伝統的な人間の内面世界をもう一つ上のレベルで考えるとどうなるか、それを解くための試みを続けてきているつもりなのだが、なかなか

かうまくいかない。グローバルな価値尺度としてはIT技術の方が圧倒的な力を持っているからだ。容易には解決できない問題だが、私はそこに一つのヒントのようなものがあると思っているので、最後に申し上げてみたい。

漱石は最晩年、未完に終わった小説『明暗』を書いたが、執筆するのは午前中だけで、午後になると絵を描き漢詩や俳句を作った。最後に求めた境地が「則天去私」だったとはよく言われることだが、絵や詩歌に打ち込むことによって彼は煩悩系の「こころ」の世界から自分を解放しようとしていたのではないか。絵や詩のほかにもよく書き、至福の時間だったようだが、親しい友人だった画家の津田青楓は、良寛の書に親しむ以前と以後とで漱石の書には大きな変化があるという意味のことを言っている。言われてみると、良寛という存在が不思議な魅力で迫ってくる。

冒頭で挙げた土居健郎さんに生前お目にかかり、「外国で最先端の精神医学を修めた先生が、日本の歴史の中で一番尊敬する人物は誰ですか」と尋ねたら、「それは、良寛です」という答えが返ってきた。私は驚いたが、やがて納得した。土居さんのいう良寛と、津田青楓の言葉から浮かび上がる漱石の良寛は重なる。私は、かねてから良寛という人物は近世の出口ではなく近代の入り口に立つ人だと思っているが、漱石が直面して悩んだ「こころ」の二重性を受け入れ、それを超えていくための入り口あるいは希望の輝きとして存在しているのが良寛なのではないか。これは個人的なつぶやきで、インターネットを全然使えない私の“ツイッター”である。

## 第2部 | これまでの10年の軌跡

### ① フォーラム活動10年の歩み

2005年発足以来、これまでの活動をVTRで紹介しました。2007年に「提言書」を発表し、2008年から子どもたちの「こころを育む」活動の募集・表彰や、有識者メンバーが全国大賞の受賞団体を訪れて交流する全国キャラバンを行っています。また、2011年から2013年にかけて、トヨタ財団との共同プロジェクトで東日本大震災の支援活動も実施しました。

### ② これまでに全国大賞を受賞された7団体の活動を紹介。うち2団体に実演

2008年度からスタートした全国運動は、有識者メンバーが全国各地を訪問し、地域の実践者と交流する『全国キャラバン』と、各地で取り組まれている「こころを育む活動」を表彰し紹介する『全国大賞表彰』です。ここでは2008～2014年度に全国大賞を受賞された団体に今現在の活動取材したVTRで、さらに充実した取り組みを紹介しました。また、その中から下記2団体にステージで活動内容を発表していただきました。

#### 熊本市立出水南小学校

2013年度全国大賞受賞

活動テーマ 小学校と支援学校の子どもたちが学び合い、成長し合う交流活動

同校は創立以来35年にわたり隣接する熊本支援学校との交流活動を続けています。今回はその活動をVTRで紹介し、交流活動を通じて友達への思いやりや助け合うことを学んだ生徒による作文が発表されました。



#### 山形県立置賜農業高等学校演劇部

2009年度全国大賞受賞

活動テーマ 農業高校の視点から、食を伝える食育ミュージカル

同校演劇部は農業高校という特性を生かして、食の大切さを伝える食育ミュージカルを制作し、地域の小・中学校や児童館、公民館で上演する活動を行っています。今回はそのミュージカルを上演していただきました。





## 第3部 有識者メンバーによるパネルディスカッション

テーマ 「次世代に伝えたい日本人のこころ」

パネルディスカッションでは、遠山敦子氏をコーディネーターに、有識者メンバーから5名をパネリストに迎え、「次世代に伝えたい日本人のこころ」について討議いただきました。

- パネリスト** **こころを育む総合フォーラム 有識者メンバー**
- 上田 紀行氏 (東京工業大学バラルアーツセンター長・教授)
  - 中村 桂子氏 (JT生命誌研究館 館長)
  - 平野 啓一郎氏 (小説家)
  - 滝鼻 卓雄氏 (元 読売新聞東京本社会長)
  - 安西 祐一郎氏 (日本学術振興会 理事長)
- ※氏名: 着席順
- コーディネータ** 遠山 敦子氏 (パナソニック教育財団 理事長・現顧問)
- 総 評** 山折 哲雄氏 (国際日本文化研究センター名誉教授、こころを育む総合フォーラム座長)



### 各パネリスト 発言要約

#### 上田 紀行氏

命や生き方そのものを処していく “処世術”が今の日本にはない

科学技術の進展とともに、こころは単に1人の中にあるものではなくてきた。こころは人と人の中にある、育み合う関係の中にあるという考え方もあるが、インターネットやSNSの場では自分が皆に承認されなければならない。こころが生まれ、こころの琴線にふれるような言葉が語られる場がなくなっている。

今の日本人が不安なのは、人間の世界しか見えていないから。小さな生物を見て「負けるな一茶これにあり」といった気持ちにならないと、不安は解消されないだろう。処世術とは違う、命や生き方そのものを処していく“処世術”が今の日本にはない。生を処するには人間を超えたものが必要で、お天道様やご先祖様、何か向こう側から見ている目があるという感覚を復活させられないものだろうか。「できる人」より「魅力ある人」になり、皆が皆の人生に痕跡を残し合うような場を作っていくことが大切だ。



#### 中村 桂子氏

小さな生き物と向き合うことがこころを育てる出発点

人間は自然の一部だ。幼い子どもはコンクリートの隅にも小さな花やダンゴムシを見つける。大人は「早く行かなければ」と連れて行ってしまいが、それをやめることが子どもの「こころ」を育む出発点だと思う。小さな生き物と向き合うことが人と人の間に「こころ」を大事にする基本になる。生き物の特徴は多様性。私たち人間も基本的には同じでありながら、一人ひとり違うところがある。教育の場では、〇×できめつけず多様性を認め「同じだけれども違う」という考え方で豊かな知を育てたい。

尊敬する人は「偉人」である必要はない。私には小学校の時から尊敬する先生が何人もいて、親もその尊敬の気持を共有してくれた。今そういう関係が少ない。一律の価値の中で競争することになったからではないか。地域や家族など小さな日常の中で生まれてくる尊敬の気持を大切にしたいと思う。



#### 平野 啓一郎氏

自己肯定感と社会の恩恵を受けている実感が必要

人には遺伝的にも環境的にも「個性」があって、それだけでは「社会」が成立しないので学校教育は共通性を身につけさせるわけだが、多様な関心を持つ人がいろいろな機能を担ってくれないと社会は成り立たない。「人と同じように」と「個性的に」の間には矛盾があるので、自己肯定という感情が大切になる。一方、一人では生きていけない社会を維持するためには納税などの義務があり、それを果たすには社会の恩恵を受けているという実感が必要だ。

今の若い人には、なかなか尊敬の気持ちが湧いてこないという現実があり、尊敬の価値観がもう一度見直されるべきだと感じる。人を尊敬するには謙虚さも必要で、日本人の相手を気遣う謙虚さは外国人にも好感を持たれているはずだ。僕も日本人とは何なのかということやずっと考えているが、これからは世界のいろいろな国の人と接していくことを思えば、やはり「人類」としての見地が必要になるのではないだろうか。



#### 滝鼻 卓雄氏

自分のこころを相手に伝える手段を忘れた“無言社会”

最近、込み合う新宿駅の西口でJRの若い2人の駅員が中年男性と言い争っていた。くわえたばこの中年男性に「ここは禁煙。危険です!」と、駅員がたばこをもち取って下にたたきつけたのだという。「お前、何するんだ!」と怒りだした相手に「危険行為をする人から『お前』呼ばわりされる覚えはない!」と、厳しく対応している。無法者に堂々ともを言う青年駅員の態度に私は感動した。近年、面と向かって自分の考えを伝えることはまずなく、自分のこころを相手に伝える手段を忘れてしまった「無言社会」のようだ。

こころという問題を考えるとき、やはり人の考え方や複数の価値を自分自身が同時に受け入れることを心掛ければならないと思う。それは政治的な思想や経済的な価値、宗教的な心情などではなく、育ってきた環境や仕事や全く違う相手の言葉や行動を「なるほど」と感じ合うこころのことだ。



#### 安西 祐一郎氏

地域、社会でいろいろな人たちと出会う機会が大切

こころの問題を深く考える文学部の学問世界と科学技術の世界がどうつながっていくかが、これからの時代には大事だ。日本の高校進学率は約98%になっているが、高校生の約85%は「将来が不安」と感じているという調査結果がある。ITなどによって相手が見えなくなっている現状をどうするか大きな課題だと思う。

人間の多様性、尊敬されることの意味、ご先祖様の存在といったことは、子どもたち一人ひとりがいろいろな人に出会って見つけていくことが大事だが、そういう場は狭まってきている。今の子どもたちは尊敬する人となかなか出会えなくなっているが、「子どもは大人の鏡」というように、インターネットで広がっていいはずの世界が逆に狭くなってきているのは、子どもよりも実は大人の方なのではないか。子どもたち自身が、人を尊敬できるエネルギーを持てるよう大人が応援していきたい。



#### 山折 哲雄 座長 総 評



長い歴史を通じて培われ、蓄積されてきた日本人の価値観

今日は、次世代の若い人々に伝えるべき日本人のこころ、命の問題について熱いディスカッションをしていただいた。尊敬すべき人という場合の尊敬という言葉には、その人が持っている尊重すべき価値観という意味が含まれている。長い歴史を通じて培われ、蓄積されてきた価値観を表すいい言葉がたくさんあるが、それが忘れられ始めているのではないかと危惧している。

3.11の大震災と福島原発の事故以降、地震や噴火など想定外のことばかりが起きている。むしろ、この地上で起こることはすべて「想定内」だと受け取らなければならない状況にあるのではないかと。想定外、想定内という二項対立的な考え方が限界にきている今、我々が先祖から頂戴してきたたくさんの価値観でいい言葉だと思うのは「備えあれば憂いなし」だ。これは個人を超えて、いわば大衆の集団意識として受け継がれてきた価値観だが、人間の知恵や工夫を総動員して備えに当たっても、「憂いなし」となるかどうかは疑問だ。その間を埋める言葉として思い浮かぶ「覚悟」とか「諦める」とか「腹をくくって受け取る」などには珠玉のような価値観が含まれているが、これを若い世代にどう伝えていけばいいのかがこれまた至難の業。こころとは定めなき世界の事柄であり、我々の命もいつ何時、突然失われるかもしれないという定めなき運命に置かれている。こころと命の連関をそういう観点で考え直すとき、先祖が残してくれた「備えあれば憂いなし」という含蓄のある言葉の意味が改めて見えてくるような気がする。

誇りを持ち、互いを思い合って生きていくこころを伝えたい

2005年4月、当時の松下電器産業株式会社の中村邦夫社長から、「何かやりたいことをやってはどうですか」とお話をいただき、次々に起こる残酷な事件の歯どめになることができないかと考え、知恵を集めるフォーラムをつくらうと思った。初めに、山折哲雄さんにお話したところ、ぜひやりましょうとご快諾いただき、財界、教育界、メディア、さまざまな領域で活躍をされている方をお願いをしたところ、皆さん、二つ返事でお引き受けいただいた。毎月1回早朝に集まって議論し、「こころを育む」ために家庭、学校、地域社会、企業にどうあってほしいということやまとめて「こころを育む総合フォーラムからの提言」を2007年の1月に出した。社会経済的なことだけではなく、人々の心、日本人の精神はどうあったらいいかも同時に考えて、私ども一人一人がきちんと生き、生きていく限り自信を持って生きる、そして、自らが自己を磨く、他の人のことを考える、できれば公のことも考えて、自分のできる範囲でまず、やる。特に子どもたちには温かい気持ちで接する。官や行政からの角度ではなく、民間でそうしたことの輪が広がっていくことが大事である。

東日本大震災でお互いに譲り合い、あるいは助け合い、そして遵法の精神である困難を生き抜いた日本人は諸外国から大変尊敬された。あのように一人一人の庶民のこころの中に日本人としての誇りを持って、かつ、互いを思い合って生きていく。そうしたところが子どもたちにも受け継がれていくといいなと思う。

#### 遠山 敦子 理事長 (現顧問) 挨拶





# 全国キャラバン 2015

in 仙台・南吉成中学校

## 「次世代に伝えたいところ

～東日本大震災を通して～

2015年11月13日(金) / 仙台市立南吉成中学校

今回は、2014年度「こころを育む活動」の全国大賞を受賞した南吉成中学校に、約400名の参加者を迎えて開催しました。

午前中の地域避難訓練では、南吉成中学校の3年生が中心となり、一時避難所に集まった方々を中学校まで安全かつ速やかに誘導しました。体育館では避難者の受け入れや救護班の対応などを行い、お昼は炊き出しがふるまわれました。

午後からは体育館で学校による取り組み報告や生徒による成果発表が行われ、パネルディスカッションでは「東日本大震災の経験から次世代に伝えたい心とは何か」について意見が交わされました。

当日は、司会や場面転換などの進行を中学生が見事にやり遂げ、学校と地域の一体感が高まる充実した一日となりました。

### 1 地域避難訓練

中学3年生は、一時避難所に集めた人数を確認し、列の前後で安全に配慮しながら速やかに中学校へと誘導しました。体育館には、避難所や簡易トイレを設営し、救護班が待機。避難者や体調が悪い人への対応を行いました。



また、防災マップを作って、隣接小学校や住民の方々に避難所や危険箇所を告知。昼食の炊き出しでは、大量の食事を作る大変さを感じながら、アルファ米のわかめご飯と豚汁を作り、参加者全員でおいしくいただきました。

### 2 活動報告

「中学校と地域が協働する持続発展教育～多様な体験活動に基づく防災教育～」として、南吉成中学校 原先生より取り組みの内容をお話いただきました。中学生が、多くの体験を通して地域防災力を高める核となり、担い手として力強く育成されている様子を感じられました。



### 3 生徒による発表

午前中に行われた地域防災訓練の成果や課題が、グループごとに発表されました。

避難所・炊き出し・情報・救護・誘導・対策本部と6部門に分かれて大切な役割を経験した各担当者は、大変さや課題を感じるとともに、自信を得た様子で、今後に生かしたいと抱負を語っていました。



### 開会のご挨拶



佐藤校長先生  
(南吉成中学校)



小野理事長  
(パナソニック教育財団)



奥山市長  
(仙台市)

### パネルディスカッション

コーディネーター

パネリスト



阿部 芳吉氏  
(仙台大学学長)



相川 良子氏  
(こころを育む総合フォーラム選考委員)



齋藤 和平氏  
(南吉成学区連合町内会長)



中村 尚子氏  
(本校父母教師会副会長)



佐藤 淳一氏  
(仙台市教育局学びの連携推進室長)



三文字 宏子氏  
(南吉成中学校教諭)  
※氏名：着席順

コーディネーターの阿部氏は、先生方の話の要点を「自分の命を守る、優しさ・思いやり・いたわりの心を持つ、家族を大切に・それを継続する」大切さと示され、自分のできることを考え、実践してほしいと述べられました。

### 講演 「こころを育むとは～危機と不安の中で生きる～」



山折 哲雄氏

(国際日本文化研究センター名誉教授、こころを育む総合フォーラム座長)

#### 災害を「忘れる」意味と「忘れない」必要性

大災害のときにいつも思うこと、それは、人間は災害を忘れるということです。

私は、30年近く前に宮城県沖地震を仙台で、阪神・淡路大震災を京都で経験し、恐怖に打たれました。東日本大震災のときは京都にあり、一月後、被災地にまいりました。仙台、東松島、石巻、気仙沼は、惨たんたる有り様でした。その記憶も年を経ることに薄れ、どうしてだろうと思うようになりました。痛烈な、辛い体験を同じ強さで10年も20年も忘れずに生きていけるか……。生きていくためには忘れることも必要、私はそう思った。

かつて、地震学者・物理学者の寺田寅彦が「天災は忘れたところにやって来る」と言ったこの言葉は、依然として真理だなど。忘れまいと努力し続けても、必ず人間は忘れ、忘れたときに天災が必然のような顔をして発生する。地震、風水害、台風、火山の爆発が、いつ、どこで起こるか分からない日本では、忘れることが、この国土に住む人間にとっての救いかもしれない。けれども他方で、忘れまいとしてできるだけ備えをすることも欠かすことができない必要なことです。このジレンマをどのように耐えて生きていったらよいのか、難しい問題です。

#### 目に見えない危機や不安の存在

今、日本の自然災害は、確率予測として何年に一度、何%という予測はできても、何月何日にどこで発生するとは誰も言えない。これが、最大の不安の原因を成していると思います。また、関東直下型地震、南海トラフの地震、津波、富士山の噴火等々が起こったときの被害予測の数値は、大は小を兼ねるというように膨大な量になり、その通り対応すると、日本の国家財政は破綻します。これが第2の不安材料です。

さて、どうしたらいいか。我々の生き方を考え直してみる以外にないんですね。人間の想像をはるかに超える自然の力にかなうものはない。そのことを前提にどのように生きるかが、災害に備える訓練の根本にはなければならないでしょう。

#### 災害時の行動のヒントは、意外なところから

日本が奇跡的な勝利をおさめたラグビーの世界選手権で、五郎丸歩選手のボールを蹴る直前のしぐさが、大変な話題になりましたね。一瞬の決断、正確な、見事なキック。心と体のバランスを正確にとるためには、ルーティン的なリズムを体の中に植え込まなければならない。キックの直前におこなわれる8つのリズムカルなステップ、それを可能にする、深呼吸を毎日繰り返す訓練によって、無意識のうちにあの俊敏な動きができる体の形になる。その場面でいかに呼吸が重要かということ、私は五郎丸選手の動きを見ていて感じ、その心身の絶妙なコントロールは、災害時の行動の基本になるかもしれないと思いました。

災害に対応する行動の出発点は「一瞬の決断、俊敏な行動」で、それを可能にするのは体に植え込まれた心身全体のコントロール。それを身につけるのに決定的な役割を果たすのが「呼吸の作法」だと思います。

#### 呼吸を整えることが、災害対応の原点に

深呼吸は、背筋をすっと伸ばして、1、2で息を吸う、3、4、5、6でゆっくり息を吐く、そして7、8で息をとめる。やってごらんさい。息を吸うとき、人間の体は緩やかになり、それにたいして、ゆっくり息を吐くとき人間の体にはすきがなくなります。そのあとで息をストップすると、からだ全体に、瞬発力を呼び起こす。その瞬発力をめざす方向に持つていくには、今いった息を吸う、吐く、そして止める、このリズムが必要になる。私は自分の教室でこの深呼吸の話をよくするのですが、たまたまラグビーの国際試合を見ていて、これは災害の問題ともつながると思ったわけです。呼吸や姿勢を整えるスタイルが、物を考え、行動を起こす出発点になると思っており、それは同時に教育の原点にもなるだろうと。その教育の原点が、災害対応の原点にもなるんです。

今日は、皆さん方が災害に当たってさまざまに考えたことを伝えようとしている姿に感銘しました。また、防災教育・訓練への学校全体での取り組みに、本当に胸を打たれました。私なりの解釈ですが、いまいました呼吸を整える訓練が、何らかの形で学校全体に浸透していると感じました。

「一瞬の決断、俊敏にして正確な行動」が、本当の危機に際して要求されるだろうと思います。がんばってください。



### 閉会のご挨拶より

パナソニック教育財団 遠山 敦子 顧問

深呼吸し、今日のことを何か一つでも一生心にとめておこうと決めて、息を吐き切ってください。そして、今日学んだことを、生涯のあらゆる場面で実行し続けてください。また、ノーベル賞を受賞された大村智さんや五郎丸さんが、そこに至るまでの経験・努力を思い、あらゆる場面で一生懸命生きる姿勢で人生を歩んでいただきたい。

今日の行事を立派にやり遂げた皆さんは、どんなことも乗り越えて、すばらしい人生を歩んでいかれると思います。



# 2015年度子どもたちの“こころを育む活動”表彰 受賞団体 活動紹介

全国大賞 鹿角市立八幡平中学校  
【秋田県鹿角市】

## 郷土愛を育み、人間関係力を培う 八幡平ボランティアガイド

活動領域 | 学校 家庭 地域 企業 3つのこころ | 自分に 他者に 社会に

### 選考理由

ボランティアガイドという発想が、地域を知り、伝える活動として教育に落とし込まれ、中学生のこころを育む環境づくりに役立っています。このサービスラーニングの視点から学びを地域に生かす取り組みは、今後、東京オリンピックを視野に入れ、広がりが見込まれる活動です。子どもたちはガイドを通して学び合い、他者と関わりつつ郷土愛を育て、その経験は対面コミュニケーションの訓練になっています。

### 活動内容

#### 地元への誇りと、人や地域社会への適応力を育む

素直で素朴な生徒たちに、もっと自分の考えを表現し、地元に関わって生きる気概を持って成長してほしいという願いが、活動のきっかけとなりました。

自然豊かな八幡平で育つ中学生たちは、ふるさとの良さを再認識し、地元への誇りや人間関係力、自己肯定感を培うことを目的として、八幡平のボランティアガイドを行っています。

大沼・後生掛の2コースがあり、異学年の縦割りで編成された班(4・5人)が、1日3組を目標に2日間実施します。

ガイドの際は、初対面の観光客に声をかけるところから始まります。事前にガイドの心構えを身につけ、ガイド内容を覚え、興味を持っていただくための工夫もしています。

さらに、活動の展開においては、地域の学校や観光団体と連携して会場提供や練習協力の支援を受けるなど、地域全体の取り組みとして広がっており、地域活性化への期待も高まっています。

### 注目ポイント

#### ●タブレットを効果的に活用

タブレットを使って資料の検索や現地の写真撮影、内容のまとめを行い、ガイドの際の説明資料として現地で利用しています。ガイドは秋に行いますが、植物や風景を説明するときには、他の季節の写真も用意するなど、内容を充実させることで、より興味を持って見ていただけます。

#### ●興味を引き出す工夫いろいろ

ポスターやパンフレット、看板や紙芝居などを作成し、よりわかりやすく印象的に伝える工夫をしています。また、手作りの名刺やお米のお土産を渡すことで、観光客の方がご自宅に帰っても地域をPRする材料になります。

### 八幡平の基本情報



八幡平は、秋田・岩手の両県にまたがる台地状火山です。那須火山帯に属し、火山帯特有の地形や温泉、美しい景観に恵まれた八幡平地域は、昭和31年に十和田国立公園に追加され、十和田八幡平国立公園となりました。



中学生たちが、地元・八幡平を魅力的にガイド。写真は、後生掛コース・紺屋地獄の説明風景。



タブレットを使って植物を説明する様子。



紙芝居や看板などを作り、伝え方もひと工夫。

### ガイド活動の流れ

- 6月 ふるさとを学ぶ**  
その年の企画内容決定後、班編成を行い、ガイダンスで子どもたちに主な内容や心構えなどを説明します。  
案内ポイントは、大沼・後生掛の2コースで各6箇所あり、各班は、担当するポイントの説明内容を作ります。基本の内容として最初に説明マニュアルを読み込み、次にタブレットで検索した内容なども加えた補助資料を用意しておきます。
- 6月～ 準備活動/校内**  
説明内容を覚えて校内で練習を重ねます。小道具の作成はこの頃から順次行います。
- 7月 準備活動/現地**  
外来種の駆除活動とともに、説明ポイントの確認と現地練習を行います。また、このとき夏の草花の写真なども撮影しておき、本番の説明資料に加えられます。
- 9月 準備活動/校内シミュレーション**  
隣接する八幡平小学校や、ガイドで交流のある中学校の生徒に協力していただき、校内で模擬ガイドを行います。山の案内人の方々からもアドバイスをいただきます。
- 10月 準備活動/現地直前**  
本番1週間前に行う現地でのガイド練習は、山の案内人の方々に助言をいただきながら実際のガイドコースで行います。
- 10月 第2週の土日 ガイドの実践**  
当日は、観光客の方に声をかけるところからスタート。断られることもありますが、勇気を持って初対面の方に何度も声をかけます。  
ご案内する方には、最初にガイドコースと所要時間を確認し、了承が得られてはじめてガイドが始まります。  
案内ポイントでは、担当の各班が、見どころに合わせて説明。季節外の写真など、タブレットに用意した補足資料も活用します。また、次のポイントへ移動する間のフリートークも大切にしながら、しっかりと地域の魅力を伝えます。  
終了後にはアンケートにご協力いただき、1年生が昨年収穫したお米と名刺をお渡しします。
- 10月 活動報告**  
**報告会** ガイド実施の2週間後  
報告会では、自分たちのガイド活動についてまとめ、ガイドを通して学んだことをそれぞれ報告します。また、学んだ内容は、随時ホームページや学習発表会、広報に活用するほか、後輩へのアドバイスや感謝の手紙なども掲示します。

### 子どもたちの 苦労も感動も成長の糧に 変化・成長

班の編成が、異学年の縦割りであることから、上級生はリーダーシップを発揮する機会となり、それぞれの人間関係力向上につながります。また、担当箇所の説明を魅力的なものにするための資料や道具作りなどに工夫や努力が見られます。  
勇気を持って初対面の観光客に声をかけ、10回連続で断られた班もあります。それでも挨拶や笑顔は絶やさず、仲間と励まし合いながら活動を続けます。それだけに、案内した方からのお礼の手紙は、やる気につながります。ガイドする相手が外国人の場合は英語を使い、高齢者の場合はペースや足下に気をつけるなど、自然に相手を気遣う姿勢が養われています。

### 大沼コース



### 後生掛コース



高齢者を気遣いながら移動。

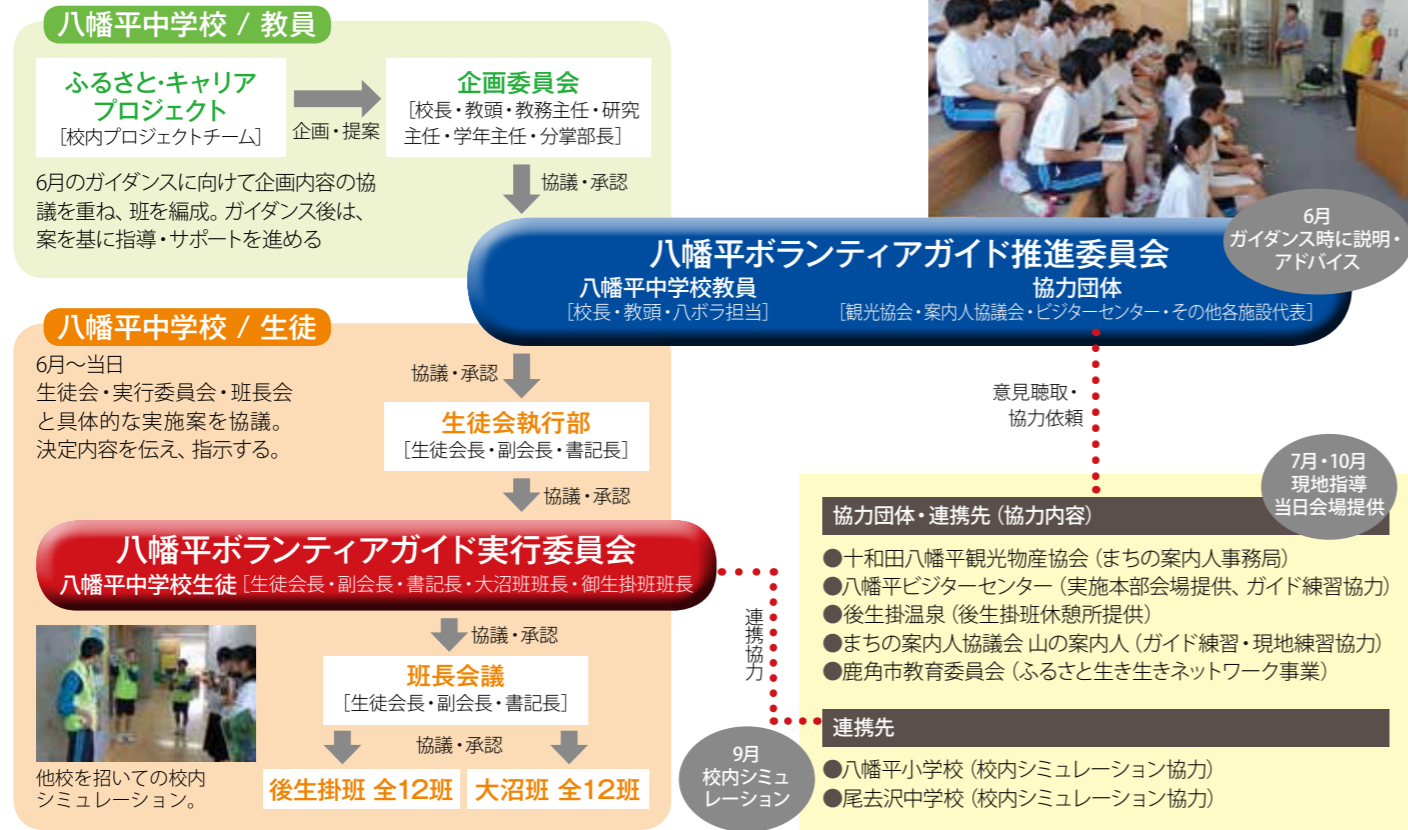


片言の英語で外国人にも対応。



活動の展開

3年間の活動で、地域団体との協力体制が確立。ガイド活動の進行を支えています。



活動の広がり

地域への誇りが成長のステップに

2014年度は、全校生徒115名が191組483名を、2015年度は雨天日を含む2日間で、150組400名を案内しました。

1年目は、3年生のみの班で26組を案内し、2年目には観光客30組に小学生の校外学習案内も実施するなど、順調にガイドの幅を広げてきました。

また、子どもたちの成長においては、目的ごとに達成経過をまとめてみました。

人間関係力・自己肯定感の醸成

ガイドを通して挨拶や笑顔が身につく、年齢差を障害としない人間関係力が培われています。また、初年度に比べて、案内する際の積極性や地元への誇りが大きく育っている様子が見られ、自己や地域への自信が着実についていると言えます。



観光客の方々に笑顔で対応する生徒たち。

地域との連携

地域を代表する観光地の施設や協力団体、郷土芸能の保存会などに教えを受け、近隣の小中学校や観光物産協会などと連携し、内容の充実を図っています。子どもたちには、地域関係者との関わりの中で、地元八幡平に生きる誇りや喜びが生まれています。



地域の施設や団体が子どもたちをサポート。

ふるさと・キャリア教育の充実

まず、ふるさとの魅力を知ることで郷土愛が生まれ、地元の良さを発信する経験が、リーダーシップや思いやりの心、目標達成能力など社会で必要な要素を身につける訓練になっています。また、感想からは、ふるさとで生きる気概も多く感じられます。



報告会で学んだことを共有し、次回に活用。



現地で山の案内人の方々に助言も。

ガイド指導・戸館さんが見た子どもたちの成長ぶり

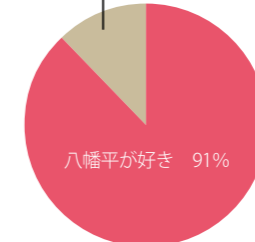
戸館 忠氏 (山の案内人)

初年度は、私たちがお客様を子どもたちのところへ誘導し、子どもたちは、原稿を覚えるのが精一杯といった自信がなさそうな感じでした。しかし、2年目に自分で声をかけて案内するようになると自主性が出て、3年目4年目には見違えるように積極的で素晴らしい案内になりました。また、最初は地元の山でも行ったことがなく関心が薄かった子どもが、自分で案内し始めてからは関心を持って覚え、愛着を持って熱心に説明できるようになりました。この2点で大きく成長したなど実感しています。

参加した皆さんの声

- 観光客の方々に喜んでもらい、ほめられて嬉しかった。(1年生)
- ガイドを通して充実感や達成感が得られた。(3年生)
- 地域の方たちから、知らないことを教えていただいた。(2年生)
- 人との交流や言葉遣いは、今後に役立つと思った。(2年生)
- 縦割り班の中で、コミュニケーションがとれて良かった。(2年生)
- 八幡平中の誇れるものとしてガイドを続けていってほしい。(3年生)
- お客様の笑顔を見たことで、とても幸せな気持ちになった。(3年生)
- 「こんなに近くに誇れるものがあっていいね」と言われて嬉しかった。(1年生)
- ガイドの経験を通してリーダーシップが身につけられた。(3年生)

その他…あまり思わない、分からない 9%



アンケートでは、八幡平が好きと答える生徒が年々増加。グラフは平成27年度：年度末評価。



「八幡平の良さをもっと伝えたい」誇りを胸にガイドを行っています。



ガイド終了後は、達成感に満ちたこの笑顔！



ガイドした方々からの感謝の手紙が励みになります。

3つの工夫

進める工夫

初めてガイド活動に触れる生徒たちにも内容の把握や練習がしやすいように、基本マニュアルを用意しています。また、ガイド地では、温泉施設や地域ボランティアの方々に協力を得て円滑に活動を進めています。告知やPRについては、観光物産協会や市の教育委員会、小学校と連携して取り組んでいます。さらに、保護者や生徒、教職員へのアンケート結果を活動に反映しています。

広げる工夫

中学1年生が、小学校の高学年時に収穫した「八幡平あきたこまち」を観光客にプレゼントするなど、近隣小学校と連携し、お土産という形でも地域のPRにつなげています。同じようにガイドに取り組む隣接中学校との連携も進めているところです。また、郷土芸能の保存会、地域の物産関係事業所と連携して活動の幅を広げ、子どもたちが郷土を愛する心を育む活動を展開できるよう活発に協議の場を設けています。



修学旅行でも配布し「鹿角のみどころ」パンフレットを配布。

続ける工夫

保護者への調査では、この活動への支持は84%と高い数値が得られています。また、活動の継続には移動方法が課題となっていました。市の教育委員会の協力により、市バスの活用が認められたことで移動手段が確保できました。今後は、保護者の高い支持の継続や教育効果の伸長を図るとともに、地元農産物や郷土芸能の紹介、観光地の紹介を通して、地域全体が活性化できるよう取り組みの構築を目指しています。



小学校で収穫した八幡平産あきたこまちを記念にプレゼント。

将来の活動の方向性

中学生によるボランティアガイドという活動について、活動を継続していく中で、地域や保護者の理解が得られるようになってきました。今後はさらに、現地での郷土芸能の紹介や、地元経済団体との連携による物産PR・観光PRへの取り組みを検討しています。また、この活動が地域の元気の源となり、少子高齢化が進む地域を明るくする材料になることを目標に、活動を進めていきます。



**優秀賞** 一般財団法人 キッズ・メディア・ステーション  
【宮城県仙台市】

つくる力・つたえる力・つながる力を育む  
「石巻日日こども新聞」

活動領域 **学校** 家庭 **地域** 企業 3つのこころ **自分に** **他者に** **社会に**

**選考理由**

震災で壮絶な体験をした子どもたちが、表現によって心のアウトプットを図っています。地域を知り、伝え、広げていくキャリア教育が企業やNPO、学校との連携で成果を上げています。



仙台で行われたサッカースクールで英国マンチェスター・ユナイテッドの取材をする小学生。



上/グループで校正を行う小学生たち  
下/年長者と年少者が組み印刷に立ち会っています。



石巻日日こども新聞

**活動内容**

**震災を乗り越えて力強く生きる力を身につける**

東日本大震災の壮絶な体験が子どもたちの心のトラウマにならないためには、表現し心の中からアウトプットすることが必要と考え、「つくる力(表現力)・つたえる力(コミュニケーション力)・つながる力(行動力)」を育み、力強く生きる力を身につけること、地域内外に災害の記憶を伝え、関心と備えを喚起することを目的に、石巻の子どもたちによる取材活動で石巻の今を伝える「石巻日日こども新聞」を発行しています。石巻日日新聞社の協力を得て2012年3月11日に創刊。ブランケット判カラー4ページの新聞を年4回発行し、2015年12月現在の発行部数は5万部。並行して、表現力やコミュニケーション力を磨くワークショップも開催しています。

**子どもたちの変化・成長**

子どもたちは取材によって自分と類似の体験や同じ思いを持つ人に出会い共感することで心を癒し、経験や気づきを情報として発信すること、地域や社会を知り、よきロールモデルとしての大人と出会うことでモチベーションを高めています。

**参加者の声**

- 活動を始めた小6のころは人前に出るのが苦手だったが、記者活動を通じて自分の意見を言えるようになった(高1)
- 取材で人に会うことが刺激になる。その力がバネになる(中2)
- 文章力がついたと友人からほめられるようになった(中2)
- 幼稚園の取材で出会った先生のようになりたいと思う(小6)

**3つの工夫**

**進める工夫**

子どもたちは地域とその歴史への関心が芽生え、郷土愛を育み始めています。また、国内外読者との交流や地域外への取材の機会も増えてきたことから、文字媒体だけでなく、映像、音声、パフォーマンスなど表現の仕方を広げています。

**広げる工夫**

寄付者である「こども記者サポーター」に普及協力もお願いし、国内各地および海外(イギリス、フランス、アメリカなど)に読者を広げています。活動開始から10年目となる2021年までに有料読者を1万人に増やすことが目標です。

**続ける工夫**

年長者が年少者の面倒を見ること、子ども同士で教えあい引き継いでいくことを奨励し、常に新規参加や新しい世代を歓迎しています。将来、「こども記者」経験者がさまざまな形で地元へ根付く存在となることを目指しています。

**将来の活動の方向性**

震災がきっかけで始まった「子どもの・子どもによる・子どもと大人のための情報発信活動」を、新聞というメディアとして地域に根付かせ、そのノウハウを地域内外に広げて、子どもの意見と発想を広く社会に伝える活動を目指します。

**活動の広がり**

● **地域内外との連携**

新聞づくりについては、地元新聞社・石巻日日新聞社の全社的な協力を得ているほか、普及・配布については、石巻日日新聞への折り込みほか、国内外の寄付者である「こども記者サポーター」、NPO石巻復興支援センター、石巻市教育委員会、東松島市立大曲小学校にも協力をいただいています。

● **多彩に広がるコンテンツ**

つくる力・つたえる力・つながる力をつけた子どもたちの表現活動は新聞のほか、子どもたちの会話をラジオ番組風にまとめてYoutubeで公開する「石巻日日こどもラジオ」や、東日本大震災を伝える高校生の写真展「ツタエル」、子どもたちのオリジナルシナリオ「女の子スパイのまき」など、多彩に広がっています。2015年4月からは中学生以上の記者が石巻ゆかりの年配者に取材し、写真と文章でかつての石巻を綴る「わたしの心に残る石巻」の連載が石巻日日新聞で始まりました。

連絡先 ●所在地: 〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉5-3-47-202 ●TEL・FAX: 022-721-3143  
●E-mail: info@kodomokisha.net ●HP: http://kodomokisha.net ●代表者・担当者: 太田 倫子

**優秀賞** とどろみの森学園~箕面市止々呂美小・中学校  
【大阪府箕面市】

とどろみに生きる

活動領域 **学校** 家庭 **地域** 企業 3つのこころ **自分に** **他者に** **社会に**

**選考理由**

9年間を見通して、地域の自然や産業、さらには人間や社会を理解し、愛情を育てるというトータルな取り組みが、形式的ではない真の体験学習となり、地域への愛着と参加意識を育んでいます。



里山整備への協力で斜面の木のない所に植樹する6年生。



左/防災キャンプにおいてロケットストーブで炊飯する5年生。  
右上/クヌギの木の枝を切りそろえて炭焼きの原木づくりをする7年生。  
右下/里山整備への協力で間伐体験をする8年生。

**活動内容**

**地域への愛着と参加意識を育む9年間**

地域の自然を愛し、地域産業を守り、受け継いでいく使命を自覚することで、自分や周りの人、社会を見つめ、たくましく生き抜く人を育てることが活動の目的です。小・中一貫教育の利点を生かし、1年生～9年生の縦割り活動、全教員が年1回ずつ行う研究授業、全学年に共通した学びのスタイルの確立など、子どもたちの生きる力を育む「もり森プラン」を作成。また、地域と密に連携し、花いっぱい運動、びわの袋かけと収穫、シイタケ栽培、栗拾い、防災キャンプ、川学習、稲作、カブトムシ・オオムラサキの飼育・放蝶、里山への道づくりと植樹、炭焼き体験、間伐体験など、多彩な自然・産業体験を各学年で行っています。

**子どもたちの変化・成長**

自然や動植物を愛する活動を通して、やさしさや思いやりを持つ子どもたちが育っています。また、地域の人々との結びつきが強まり、子どもたちは感謝の気持ちを持つとともに、里山の暮らしや環境について考えるようになっていきます。

**参加者の声**

- 里山の様子を見たり間伐体験をしたりして、自分の今すべきことは何かと考え行動できるようになった(8年生)
- 炭焼き体験においてクラスで何かをやり遂げる楽しさや達成感を味わうことができた(7年生)
- ノコギリで竹を切るのは、思ったより力がいって大変だったけど楽しかった(5年生)

**3つの工夫**

**進める工夫**

学びと心の育ちを目指す「もり森プラン」を作成し、縦割グループによる掃除やオリエンテーリング、ランチなどの活動を行うほか、毎年行う学力体力生活調査「ステップアップ調査」をもとに弱点の克服に努めています。

**広げる工夫**

NPO法人とどろみの森クラブや箕面整備事務所、池田土木事務所といった公的機関との連携を深めて地域から学ぶ活動を進めるとともに、青少年を守る会、自治会、PTA、地域農家の方々の協力を得て、多彩な活動を行っています。

**続ける工夫**

学校ホームページの毎日更新や学校便りの保護者・地域配布で、子どもたちの学びと心の育ち、活動の様子を情報発信。国内外からの視察を受け入れ、毎年公開授業研究会を実施して、意見交流や改善に努めています。

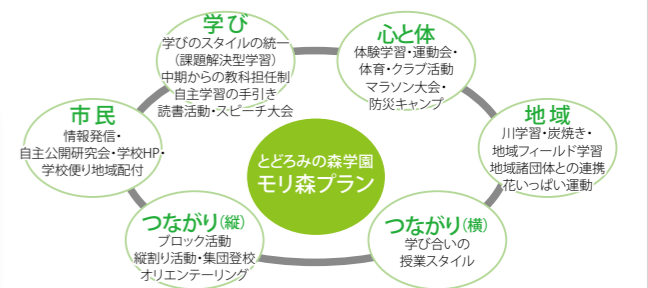
**将来の活動の方向性**

止々呂美の里山を守り受け継ぎ、地域で誇りを持って生きていくために、①地域産業の理解と伝統の継承、②里山の生き物保護・愛護、③余野川と暮らしの結びつきの理解を深め、稲作と水の関連を追究する、という3本柱で活動していきます。

**活動の広がり**

● **縦横に広がる連携体制**

地域、学校、家庭(PTA)という横のつながり、1年生から9年生までの縦のつながりを通して、子どもたちが多様な体験をサポートする体制を整えています。



連絡先 ●所在地: 〒563-0257 大阪府箕面市森町中1-23-14 ●E-mail: todorominomorigakuen@mail1.koumusub.net  
●HP: todorominomorigakuen@mail1.koumusub.net ●代表者: 市原 義憲(校長) / 担当者: 奥畑 仁(教頭)



## 奨励賞 特定非営利活動法人 湘南市民メディアネットワーク 【神奈川県藤沢市】

### 映像制作授業・ワークショップによる 青少年育成・自立支援・社会参加事業

活動領域 | 学校 家庭 地域 企業 3つのこころ | 自分に 他者に 社会に

#### 選考理由

青少年育成に映像制作を用いる切り口が、現代的でユニークです。7年間の実績は多くの専門家と子どもたちの興味を引き込み、今後のブラッシュアップに期待できる効果的な活動になっています。



映像制作ワークショップで撮影を体験する子どもたち。



右/学生によるNPO団体のPR映像制作風景。左上/映像を確認し、笑顔に。左下/映像フォーラムで作品を発表する様子。

#### 活動内容

##### 青少年の育成や自立、学生の社会参加を目的とした映像制作の支援活動です。

さまざまな環境の青少年を対象に、映像制作の授業やワークショップを行い、社会や世界への新たな視点の発見や、表現力、コミュニケーション能力を高める機会を作っています。

総合高校や大学の学生には、NPO団体のPR映像作りを指導。地域の課題と、その解決に向けて活動する人々から社会を学ぶ場となっています。

さらに、上映会や映画祭などの作品発表においては、参加者各自が視点の持ち方や多様性を学び、認め合いながら自己肯定感が高められるようサポートしています。

#### 子どもたちの変化・成長

学生たちは、地域の課題に取り組む人々の取材や映像表現を通して成長し、社会参加を果たしています。

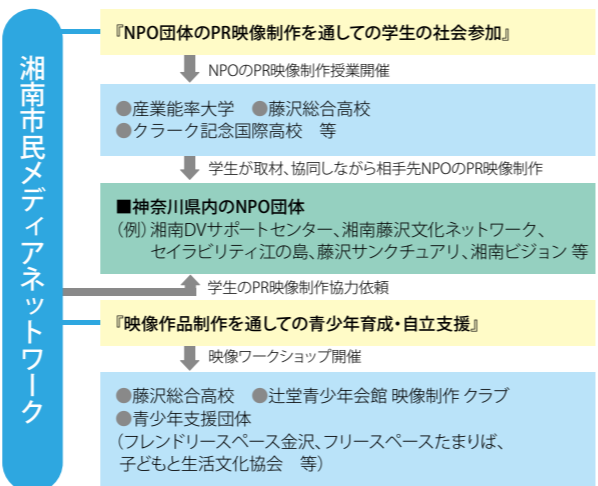
また、不登校・ひきこもりの青少年たちは、映像制作を通して人や作品の魅力、自己の役割を発見し、自己肯定感を高めています。

#### 参加者の声

- 普段は知らないNPO団体の方の話や、知らない世界や想いに触れ、映像で伝えたい。 (高2)
- カメラを向けると新しい発見があり面白かった。 (中3)
- 失敗しても、仲間の掛け声でやる気になれた。 (小5)
- 持ち味を活かすモノづくりの貴重な体験ができた。 (高3)

#### 活動の広がり

7年間の活動で、地域の理解が深まり、協力体制が充実しました。さらに、映像制作による青少年育成・社会参加のフォーラムを開催し、賛同する団体との交流の幅を広げています。



#### 3つの工夫

**進める工夫** 映像制作による青少年育成・自立支援活動では、社会学者や臨床心理士、メディア系有識者、支援団体でワークショップを検証し、現場に生かしています。効果的なプログラムをまとめた冊子と作品DVDも制作し活用しています。

**広げる工夫** NPO団体のPR映像制作支援活動では、成果発表とPRのため毎年映像祭を開催。(一部は動画配信) また、青少年育成・自立支援活動ではフォーラムを開催。作品発表と交流、映像制作の青少年支援への有効性を伝えています。

**続ける工夫** 映像制作ワークショップや講座を行う全国の団体、有識者と交流し、情報交換や勉強会を実施。また、自作の青少年支援・映像制作ガイドブックを教育団体、青少年支援団体に配り、映像制作効果の周知を図っています。

**将来の活動の方向性** 現在、学童保育や小中学校など公教育内へも映像制作体験・授業の実施を提案中。今後は、指導対象や交流範囲を広げ、より多くの青少年の自己肯定感や社会力、コミュニケーション力の向上に寄与できる活動を目指していきます。

連絡先 ●所在地: 〒251-0052 藤沢市藤沢93 新堀ライブ館2階 ●TEL・FAX: 0466-47-7765  
●E-mail: info@scmn.info ●HP: http://scmn.info ●代表者: 森 康祐 ●担当者: 中野 晃太

## 子どもたちの“こころを育む活動” 2014年度受賞団体

### この1年(2015年)の活動紹介

子どもたちの「こころを育む活動」を支援する全国運動は、2008年度より優れた活動を支援し続け、2015年度で8回目の表彰となりました。受賞された皆さまの多くは、その後も精力的に活動を継続されています。ここでは、2014年度受賞者の皆さまの受賞対象となった活動と、受賞後の活動についてご紹介いたします。

#### 2014 全国大賞

### 仙台市立南吉成中学校 【宮城県仙台市】

#### 多様な体験的活動を取り入れた持続発展教育 ～大震災の復興支援活動と防災教育を通じて、“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ、心と姿勢の変容を目指す教育実践活動～

生徒の「復興のために何かしたい」という声を実現し、大震災の教訓から「自分にできること」を考えて実践する自律心、判断力、責任感などを培うことを目的に、復興支援活動や防災教育を行っています。

復興支援として「津波被災農家に弟子入り体験」を、防災教育では「中学生が主導する地域防災訓練」を毎年実施。学校・地域支援組織「チームMY・SP」を設立し、地域ぐるみで活動を展開しています。

●所在地: 〒989-3204 仙台市青葉区南吉成5-18-2 ●TEL: 022-277-4377 ●FAX: 022-303-4328  
●E-mail: chikufu@sendai-c.ed.jp ●HP: http://www2.sendai-c.ed.jp/~chikufu/ ●代表者: 佐藤 郷美/担当者: 千葉 仁

#### 2015年の活動 地域の一員としての自覚と絆が深まる活動に

継続して「津波被災農家弟子入り体験」と「地域防災訓練」を実施。「津波被災農家弟子入り体験」では、学校内での綿花栽培を試み、農家の方々の苦勞をより体験することができました。また、「地域防災訓練」では、町内会長さんにお話を聞き、異年齢(縦割り)班で居住地域の危険箇所を調査する「地域探検」を実施。訓練時に発表し、お褒めの言葉をいただくなど、地域との絆が深まりました。



上/秋に綿花を収穫。夏は除草も。下/「地域探検」の結果を発表する子どもたち。

#### 2014 優秀賞

### 北海道中標津農業高等学校 【北海道標津郡中標津町】

#### 食育プログラム 「計根別食育学校」

地域の幼稚園・小学校・中学校の子どもたちを高校に招き、発達段階に応じた継続的な食育活動を行っています。各種野菜の栽培から加工、調理までを体験し、農・食・命を考える心と郷土愛を育てています。

●所在地: 〒088-2682 北海道標津郡中標津町計根別南2条西1-1-1 ●TEL: 0153-78-2053 ●FAX: 0153-78-2465  
●E-mail: Nagri-gyomu@ed.nakashibetsu.jp ●HP: http://www1.nakashibetsu.jp/nagri/ ●代表者: 小池 博志/担当者: 仲本 大輔

#### 2015年の活動 地域の食農一貫教育の再構築を

今年度から計根別小学校・中学校が計根別学園という小中一貫校になったことから、地域の食農一貫教育の再構築を目指し、幼稚園児は「感じる」、小学生は「学ぶ」、中学生は「考える」というキーワードで活動しました。



活動開始から10年。高校生の指導のもと小学生は地域農産物であるジャガイモ、小麦の栽培を通して収量調査に挑戦しました。

#### 2014 優秀賞

### 精華町立東光小学校 【京都府相楽郡精華町】

#### やさしい町づくり・やさしい人づくり

地域の団体や施設と連携して「認知症キッズサポーター講座」を実施。小学4・5・6年生を対象に、高齢者施設での体験も含む段階的なプログラムによって、子どもたちの認知症の知識を深め、思いやりの心を育てています。

●所在地: 〒619-0237 京都府相楽郡精華町光台7丁目43番地1 ●TEL: 0774-95-0400 ●FAX: 0774-95-0401  
●E-mail: higashihikari-es.p@edu.town.seika.kyoto.jp ●HP: http://www.kyoto-be.ne.jp/higashihikari-es/ ●代表者: 山下 芳一

#### 2015年の活動 小学校から地域へ大きく広がる活動

「認知症キッズサポーター講座」が町内全5小学校と2中学校へと広がり、本校で月2回高齢者対象「認知症予防教室」が開かれたほか、児童と高齢者の交流等も新しく行いました。「精華フレンドシップコンサート」は3回目になりました。



小・中・高の児童・生徒が音楽で人を集め、各種福祉団体が啓発活動をする「精華フレンドシップコンサート」。

#### 2014 奨励賞

### 特定非営利活動法人 奄美青少年支援センター「ゆずり葉の郷」 【鹿児島県奄美市】

#### 子ども及び保護者、障がい者に対する相談支援活動

子どもや保護者、障がい者に対する支援活動を行い、1983年より約3万件以上の相談に対応。学校や家庭に問題を抱えた子どもたちを受け入れ、地域と連携して生活援助・自立支援・就労支援を実施しています。

●所在地: 〒894-0036 鹿児島県奄美市名瀬長浜町23-25 ●TEL: 0997-56-8202 ●FAX: 0997-56-8202  
●E-mail: yuzuriha@gamma.ocn.ne.jp ●HP: http://yuzurihanosato.net ●代表者: 前田 勝美/担当者: 富川 玉緒

#### 2015年の活動 地域の協力による多様な自然体験、職場体験

関係機関との連携に加え、地域の方々との自然体験活動(里いも掘り、稲刈り)をしたほか、IT関係・農家・新聞社・ガソリンスタンドなどの職場体験を行い、子どもたちの仕事に対する意識向上を目指しました。



地域の方々と一緒に里いも掘りをする子どもたち。



# 歴代全国大賞受賞団体

子どもたちの“こころを育む活動”表彰

歴代の全国大賞受賞団体(2008年度～2014年度)

|        |   |
|--------|---|
| 2008年度 | <p><b>公益社団法人 群馬県助産師会 (群馬県)</b><br/>〒373-0018 群馬県太田市丸山町250-7/TEL.0276-37-5198</p> <p>テーマ <b>子どもの自己肯定感を育む「いのちの講座」</b></p>                                |
| 2009年度 | <p><b>山形県立置賜農業高等学校演劇部 (山形県)</b><br/>〒999-0121 山形県東置賜郡川西町大字上小松3723/TEL.0238-42-2101</p> <p>テーマ <b>農業高校の視点から、食を伝える食育ミュージカル</b></p>                       |
| 2010年度 | <p><b>特定非営利活動法人 オバパト隊 (熊本県)</b><br/>〒862-0913 熊本県熊本市尾ノ上1-39-15/TEL.096-381-2447</p> <p>テーマ <b>高齢女性パトロール隊による、安心安全な子育て環境づくり</b></p>                      |
| 2011年度 | <p><b>石樽の里コミュニティ (三重県)</b><br/>〒511-0266 三重県いなべ市大安町石樽南611いなべ市立石樽小学校内/<br/>TEL.0594-78-0002</p> <p>テーマ <b>地域全体で子どもを守り育てるための学校と地域による組織づくりと協働活動</b></p>  |
| 2012年度 | <p><b>東中ファミリーサポーターズ・東中地域活性隊 (兵庫県)</b><br/>〒664-0021 兵庫県伊丹市高台2-54伊丹市立東中学校内/TEL.072-782-3058</p> <p>テーマ <b>地域・学校・家庭と生徒たちによる循環型の地域活性活動</b></p>          |
| 2013年度 | <p><b>熊本市立出水南小学校 (熊本県)</b><br/>〒862-0941 熊本県熊本市中央区出水4-1-1/TEL.096-363-5671</p> <p>テーマ <b>小学校と支援学校の子どもたちが学び合い、成長し合う交流活動</b></p>                       |
| 2014年度 | <p><b>仙台市立南吉成中学校 (宮城県)</b><br/>〒989-3204 宮城県仙台市青葉区南吉成5-18-2/TEL.022-277-4377</p> <p>テーマ <b>大震災から学び、前に進む力を培う、復興支援活動と防災教育</b></p>                      |

●詳しい活動内容はホームページで紹介しています。

# パナソニック教育財団 紹介

—「未来をつくる創造力と豊かな人間性」を育む—

パナソニック教育財団は、1973年にICT教育の振興を目的に設立され、40年以上にわたって、小中高等学校等の教職員や研究グループを支援し、ICTを活用した教育の普及・拡大を目指し、研究・助成活動に取り組んできました。

現在は、2005年に立ち上げた「こころを育む総合フォーラム」と合わせ、公益活動の両輪とし、次世代を担う子どもたちの「未来をつくる創造力と豊かな人間性」を育む活動を行うとともに、その活動内容や研究成果を幅広く発信しております。

**学校教育に対する  
研究・助成事業**

「未来をつくる創造力と確かな学力」を培うために、ICTを活用し、実践研究に取り組む教育現場に対して助成等を行う事業

**こころを育む  
総合フォーラム**

明日の未来を担う子どもたちのために、「豊かなこころを育む活動」を広げ続けていく事業

学校教育に対する研究・助成事業 2015年度活動

**実践研究助成**

ICTを効果的に活用して、教育内容及び教育方法の改善等に取り組む実践的研究を募集(前年度の12月～1月)「一般」と「特別研究指定校」の2種類

|     |  |             |  |
|-----|--|-------------|--|
| 一 般 | <ul style="list-style-type: none"> <li>①助成金…… 1件あたり50万円</li> <li>②助成期間… 1年間</li> <li>③助成件数… 74件</li> </ul> | 特別研究<br>指定校 | <ul style="list-style-type: none"> <li>①助成金…… 1件あたり150万円</li> <li>②助成期間… 2年間</li> <li>③助成件数… 6件</li> </ul> |
|-----|--|-------------|--|

4月に助成金の贈呈を行い、1年間授業実践と研究活動を行い、翌年の夏休みに成果の発表を行います。



助成金の贈呈



実践活動



成果の報告

**共同研究**

学校現場でのICTの活用をより効果的にするために、関係団体等と共同研究を実施

**ワンダースクール応援プロジェクト**

2年目を迎え、1人1台端末の成果を授業で公開。また、授業での活用効果を測定し、分析を行う。



**研修モデルの検討**

教育委員会等とICTを効果的に活用する研究会を立ち上げ、授業モデルの検討や研修会の仕組みを研究。



公益財団法人 パナソニック教育財団  
<http://www.pef.or.jp/>  
 詳しい内容はホームページで紹介しています。